

研究ノート

オークランド戦争記念博物館にみる ニュージーランドの多文化主義

村田 麻里子

A Report on the Auckland War Memorial Museum and New Zealand's Multiculturalism

Mariko MURATA

Abstract

This paper reports on the strategies and activities of the Tāmaki Paenga Hira- Auckland War Memorial Museum in New Zealand. It focuses on the Māori and Pacific Dimensions, which articulate the biculturalism and multiculturalism of New Zealand at the museum. For our project, in-depth interviews were conducted with 20 staff members and together they highlight how the two dimensions underline their everyday practices and how they make the museum accessible.

Keywords: museum, biculturalism, multiculturalism, Maori, Pacific, accessibility

抄 録

本稿では、オークランド戦争記念博物館の取り組みを通して、ニュージーランドのミュージアムにおける多文化主義の実現について考察する。具体的には、2日間に亘る視察と20人の館スタッフとのインタビューの様子を詳細に報告することで、館がいかにして先住民マオリの文化を軸に、太平洋の多文化を扱っているのか、またそれによっていかにミュージアムを開こうとしているのかを分析する。

キーワード：ミュージアム、二文化主義、多文化主義、マオリ、太平洋、アクセシビリティ

本稿は、科研「多文化共生時代のミュージアムを分析する手法の開発及びその理論化」¹⁾の一環として視察したニュージーランドのオークランド戦争記念博物館（Tāmaki Paenga Hira- Auckland War Memorial Museum）の調査報告である。ここでは、2日間に亘る視察と計20人の館スタッフへのインタビュー²⁾の様子を報告することで、館がいかにして先

1) 本科研の目的は、日本のミュージアムにおける多様性の推進をどのように可視化しうるのかを考えることにある。日本では、多文化共生 (multicultural coexistence) という言葉が90年代に外国人労働者をコミュニティに包摂する概念として聞かれるようになり、さらに2020年のオリンピック・パラリンピックの開催 (当初予定) が決定してからは、多様性 (diversity) という言葉がしきりに繰り返されるようになったが、ミュージアムを始めとする文化施設での取り組みは途についたばかりである。本科研では、イギリス・オーストラリア・ニュージーランドのいくつかのミュージアムを、多文化を包摂する取り組みを「伝統的」に行ってきた館と位置づけ、その手法に着目し、分析することで、日本のミュージアムにおける多様性のあり方を検討することを目的としている。

2) 2018年11月2日 (金)・3日 (土)。視察メンバーは谷川竜一 (金沢大学)、宮田雅子 (愛知淑徳大学)、村田麻里

住民族マオリ (Māori) の文化を軸に、太平洋の多文化を扱っているのか、またそれによっていかにミュージアムを開こうとしているのかを分析する。最後に、本科研のテーマでもあるミュージアムと多文化主義という観点から考察を加える。

1. 調査対象の概要

1.1 館の背景

ニュージーランドは、オーストラリアと並んで多文化・多民族を持つことで知られるオセアニアの国家である。1840年に、イギリスと、土地の先住民マオリとの「条約」³⁾によって誕生した植民地国家を起源とするこの国では、長い間、英国系移民による西洋的価値観に基づいた社会が形成され、マオリに対する同化政策が進められてきた。ミュージアムという組織も、このイギリス文化の一環として早い時期からニュージーランドに伝えられ、数を増やしてきた。戦後になると、ニュージーランドのミュージアムは「成人教育の拠点」と位置づけられ、「主として英国系文化および英語の普及を目的として」(市川2005:99)機能してきた。

1960年代後半から、先住民が権利の回復を求めて声を挙げ始め、1980年頃からは国家政策としての二文化主義 (biculturalism) が掲げられるようになった。すなわち、英国系・ヨーロッパ系住民 (パケハ)⁴⁾ と、マオリの2つの文化が等しく扱われることと、その共生を掲げる主義である。また、1974年及び1987年の移民法の抜本的な見直しにより、韓国、中国などのアジア諸国や、フィジーをはじめとする太平洋島嶼国から、多くの人々が仕事を求めて移住し (西川 2006)、ニュージーランドは必然的に多文化主義の国となっている⁵⁾。こうした状況を反映して、より多元的な教育行政が進み、ミュージアムでも、長らく収集・展示の対象とされてきたマオリ文化の扱いやまなざし、さらにはマオリ以外の太平洋島嶼国の多様な文化への目配りに対して、より意識的になっていった。

子 (関西大学) の3名。なお、初日のインタビューは、JICA 青年海外協力隊派遣・サモア国立博物館学芸員 (当時) の慶野結香氏の紹介で実現した。

- 3) ワイトンギ条約 (Treaty of Waitangi)。建国の基礎だが、英語版とマオリ語版は異なる2つの条約ともいわれ、その後のニュージーランドの歴史はその「調整」の歴史、とりわけマオリの土地をめぐる権利回復に向けた道のりだといっても過言ではない。
- 4) Pakeha。ニュージーランドへの入植者とその子孫。いわゆる白人。
- 5) オーストラリアやカナダと違って多文化主義を国家政策として掲げているわけではないが、たとえばオークランド市の目指すべき方向性が示されているオークランドプラン (Auckland Plan) には、オークランド市が120以上のエスニシティを有す人々が暮らす 'Diverse Auckland' であることが謳われているように (Auckland Council HP より)、地域ごとに多文化が推進されている。

今回視察したオークランド戦争記念博物館(写真1, 2)⁶⁾は、建国間もない19世紀後半にオークランド、ウェリントン、クライストチャーチ、ダニーデンに建てられた4つのミュージアムのひとつであるThe Auckland Instituteを前身⁷⁾としており、まさに草創期の歴史を知るミュージアムである。ニュージーランドのミュージアムの中でも最初期に開館した館の特色として、自然史(特に地質学)の研究教育を基礎に発展してきたことが挙げられる(McCarthy 2014.10.22)。とりわけ、英国からニュージーランドに移住し、1874年に館のキュレーターとなった植物学者Thomas Cheeseman(1845~1923年)の精力的な収集が館のコレクションを充実させ、1929年の開館へと結びつけた。また、1890年には、館は当時最大のマオリコレクションを保有していたという(同上)。当然、ここでのマオリ文化の収集は、当時のヨーロッパのまなざしにとっては「驚異(curiosity)」の対象であった。



写真1 外観。芝生の十字架は第一次世界大戦で亡くなったニュージーランドの戦没者たちを慰霊する展示

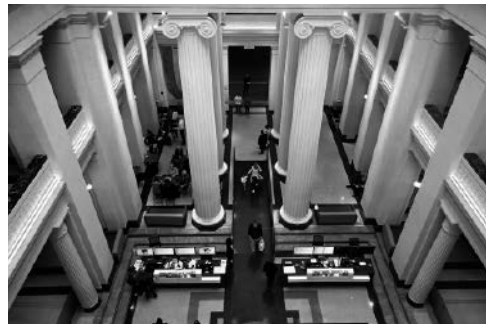


写真2 ロビー。イオニア式の柱頭が印象的な新古典主義建築

1.2 館の構成

現在、館は、マオリに加え、ポリネシアの島嶼国を含む太平洋の文化、ニュージーランドの自然史、そしてニュージーランドと戦争という大きく3つのテーマを網羅する総合博

6) 写真の撮影者はそれぞれ以下のとおりである：村田麻里子(写真1, 4, 5, 8, 13, 17, 18, 20)、宮田雅子(写真5, 10, 12, 15, 22, 26, 29)、谷川竜一(写真2, 3, 6, 7, 9, 11, 14, 19, 21, 23~25, 27, 28)。写真は宮田雅子が色調・歪み補正を施した。また、本稿のマオリと太平洋に関する写真は館の定める cultural permission process を経たものである。

7) Auckland Philosophical Society と称する団体が1852年に木造の仮設小屋で開館、2度の引っ越しを経て、1867年に専用の建物に移る。この段階でThe Auckland Institute になり、1880年にはThe Auckland Institute and Museum と明記される。その後コレクションが増えたため、1929年には第一次世界大戦の戦争記念とあわせて現在の館が完成し、Auckland War Memorial Museum になった(館HPより)。



写真3 Hall of Memories. 天井のステンドグラスには第一次世界大戦中のイギリスの自治領と植民地の紋章があしらわれている



写真4 1960年に建物後方に増築された半円形のアトリウムの外観

物館となっており、主に市の予算で運営されている⁸⁾。建物は、第一次世界大戦の戦没者を慰霊する記念館（写真3）と、新しいミュージアムという2つの目的を果たすべく、1929年につくられたものだ。1960年に建物後方に半円形のアトリウムを増築したものの（写真4）、その後30年以上改修できないまま次第に老朽化し、ようやく1994～1999年にかけて大規模改修が行われた⁹⁾。現在の展示は、ここでつくられたものが基礎になっている。その後2003～2006年にも大きな改修が再び行われ、2018年11月の訪問時には、2012年からの20年間の将来構想（‘Future Museum’）と、2017～2022年の5カ年計画のもとに、第3期の改修がはじまっていた¹⁰⁾。

ミュージアムは3階にまたがっており、地上階は「太平洋の人々（Pacific People）」、1階は「自然史（Natural History）」、2階は「心の傷（Scars on the Heart）」に大きく分かれている。

地上階「太平洋の人々（Pacific People）」では、マオリの文化と、ポリネシアなどの島嶼国の文化が展示されている（図1、写真5～8）。マオリコート（マオリの展示室）では、マオリの人々の定住にまで遡るコレクションが1000点以上展示されており、集会場であるマラエヤ、戦闘カヌー、収蔵庫など、実物の展示の他に、日用品や狩猟用の道具などが並んでいる。その他、ワイタング条約（註3参照）の詳細や、マオリの描かれた肖像なども

8) プロジェクトによっては国からの補助金も受けているが、市の組織であることを重視しており、今回の5カ年計画には、より地元の人々にアクセシブルになることを目標のひとつとして挙げている。

9) McCarthyによれば、1990年代～2000年代はニュージーランドのミュージアムブームの時期にあたり（McCarthy 2014.10.22）、館の改修の時期と重なっている。

10) 新ギャラリー Tamaki Herenga Waka: Stories of Auckland gallery は2020年後半に予定されている（館HPより）。

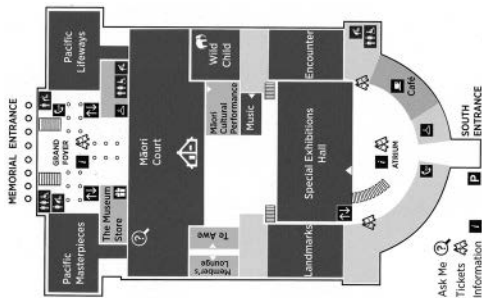


図1 地上階「太平洋の人々」のフロアマップ。
‘Auckland Museum Guide’より転載



写真5 マオリコートの展示



写真6 マオリコートの展示. 手前にカヌー、奥に
収蔵庫がみえる



写真7 太平洋コレクション



写真8 太平洋コレクション



写真9 自然史フロア (起源の部屋)



写真10 自然史フロアのキーウィ



写真11 マオリ自然史の部屋



写真12 マオリ自然史の展示



写真13 第二次世界大戦に関する展示



写真14 New Zealand Warsの展示



写真15 マオリ文化のパフォーマンス

展示されている。

1階「自然史 (Natural History)」では、ニュージーランドの地質学や自然環境について、またモア、キーウィ、ムカシトカゲ等ニュージーランド固有の生物について展示されており、館が自然史コレクションから発展したことを彷彿とさせる (写真9, 10)。中でも「マオリ自然史 (Te Ao Tūroa- Māori Natural History)」という名の展示室では、マタウランガ (Mātauranga マオリの英知) と呼ばれるマオリの自然界の科学と知識を意識した展示になっている (写真11, 12)。

2階「心の傷 (Scars on the Heart)」は、第一次世界大戦・第二次世界大戦を中心とする戦争記念館としての展示になっており、他にもニュージーランドの内戦や、ボーア戦争など、ニュージーランドが関わった戦争が網羅的に展示されてる (写真13, 14)。

また、館はマオリの無形文化財の継承にも力をいれており、定期的に「マオリ文化パフォーマンス (Māori cultural performance)」が開かれている (写真15)¹¹⁾。なお、館のホームページによると直近5年間は、毎年864,000人程度の来館者を迎えているという。

2. ミュージアム視察報告

調査の初日 (2018年11月2日) は、館の太平洋に関わる活動を統括するシニアマネージャー (Teu Le Vā Manager)¹²⁾ である Olivia Taouma のコーディネートにより、以下のインタビューと見学スケジュール

ルが生まれ、主に館のマオリと太平洋に関わるプロジェクトの話を多角的に聞くことができた (表1)。調査の2日目 (11月3日) は、10時~17時の開館時間を使い、細部の確認や、スタッフの方針がどのように館に反映されているのか

表1 インタビューと見学スケジュール (2018年11月2日)

10:00am - Mihi welcome and cup of tea
10:45am - He korahi Māori introduction talk and tour
11:45am - Human Remains Repatriation
12:30am - Lunch
1:15pm - Pacific Collections Access Project and Pacific Curators talk/tour
2:00pm - Teu le vā talk and how it works in the museum
2:15pm - Gallery Renewal visit/talk
3:30pm - Documentary Heritage visit/talk
4:00pm - Cup of tea to review

(Olivia Taouma 作成のスケジュールに当日の変更を反映したもの)

11) Youtube でも公式動画が公開されている (Māori cultural performance at Auckland Museum で検索)。

12) 関係者の役職はすべて当時のもの。Teu le vā はサモア語で「関係を育む」の意で、ニュージーランドにおける太平洋の多文化教育推進の文脈の中で使われてきた概念。オークランド戦争記念博物館では、2012年に枠づけられた Pacific Dimension を推進するために、2017年にこの概念を冠した役職が設置された。

について、全館の視察と撮影を行った。

ニュージーランドの人々の文化、自然史、戦争（歴史）という網羅的な展示を持つオークランド戦争記念博物館の、ミュージアムとしての姿勢や方向性については、マオリや太平洋の精神と世界観を「体現」するスタッフと1人ずつ（1チームずつ）対話することで、初めて掴むことができる。海外からただ視察に訪れただけの我々3人を、丸1日かけてもてなしてくれた計20人のスタッフは、部署を問わず Teu le vā（関係を育む）のホスピタリティを身体化している。したがって、やや冗長に聞こえるかもしれないが、今回は先方が用意してくれた周到なプラン（表1）をなぞりなおすことで、この館のコンセプトを捉えていきたい。おそらくそうすることで、Oliviaがここまで多角的なインタビューを組んで我々に伝えたかったことの総体を可視化できると思われるからだ。

その際に重要になってくるのは、この館が使う「ディメンション（dimension）」という概念だ。大きく Māori Dimension と Pacific Dimension の2つがあるが、直訳すればマオリの様相・次元、太平洋の様相・次元ということになるだろうか。この言葉に表れているのは、マオリや太平洋の人々との関係構築に力をいれ、館の活動をマオリや太平洋の視点で組み直していくという発想だ。い

わば館の組織全体を串刺しにするようなコンセプトで、その指針は、館が発行している一連のコンセプトペーパー¹³⁾にそれぞれ記されている。

図2は、館が20年間の将来構想の中で図示しているものであるが、館の土台にはまずマオリの文化を尊重した二文化主義（biculturalism）があり、太平洋島嶼国の多様性を奨励する Pacific Dimension も、その中に包摂されている。そしてさらにそのなかに、ア

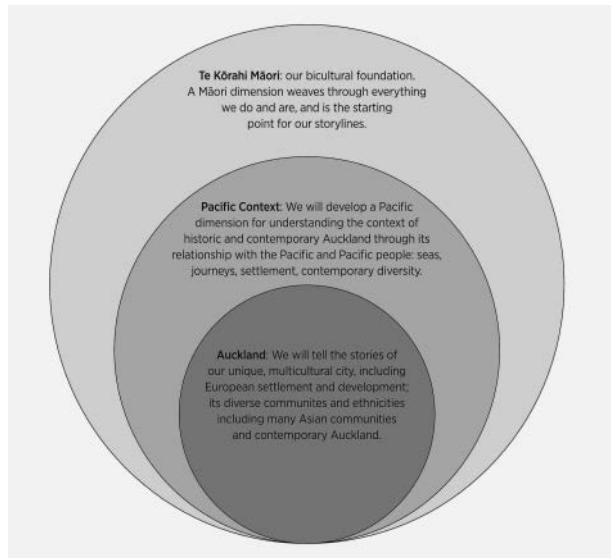


図2 'Future Museum: Auckland War Memorial Museum Master Plan' より転載

13) 参考文献資料一覧を参照のこと。

ジア圏の移民、そして植民したヨーロッパ系移民の文化がある。

2007年に打ち出された Māori Dimension は、ワイタング条約 (註 3 参照) に本来的に描かれているパートナーシップと親善を反映した He korahi Māori¹⁴⁾ (=マオリの思想・哲学) を指針としており、インタビューからはこれが館のすべての活動に通底していることが伺えた。一方、2012年に打ち出された Pacific Dimension は Teu le vā を指針とするが、He korahi Māori と Teu le vā の両者は相互補完しあい、両方の Dimension に影響を及ぼしあっているようだ¹⁵⁾。

2.1 マオリ・ディメンション (Māori Dimension)

(10:00am – Mihi welcome and cup of tea)

開館と同時に館を訪れた我々をまず驚かせたのは、館のスタッフ 7 人が受付の前で 1 列に並んで、我々 3 人を待ち受けていたことである。促されて、彼らに向き合う形で 1 列に並ぶと、その中の一人、マオリ出身の Robert Newson がマオリ語で挨拶、そして歓迎の歌を歌ってくれる。それに対してこちらからも何か返すことを促され、面食らっている暇もなく、日本語と英語での挨拶と、なぜかとっさに浮かんだ「赤とんぼ」の歌、そして日本から用意してきた土産品をその場で配布するという形で先方に「応える」形になった。その後両者近づき、鼻をこすりあわせるマオリ流挨拶を一人ずつと交わす。このようにマオリ式のお出迎えをすることで、ゲストに敬意を表すると同時に、館のコンセプトをゲストに身体レベルで伝えている。実際、その後のインタビューの背後にある館の姿勢を、この儀式でまず体感できたことが、我々の「理解」にきわめて大きな役割を果たしたように思う。

一連の儀式が終わると、食堂に案内され、紅茶とクッキー (ここは英国式?) を囲んで全員が 30 分の団欒につきあってくれる。そこで、館の歴史や建築的特徴、現在進んでいる 5 カ年計画 (2017~2022 年) などについての話を聞いているうちに、次のインタビューイーが迎えに来てくれた。

(10:45am – He korahi Māori introduction talk and tour)

Māori Dimension は、2007年に館でスタートした活動で、担当の Nicola Railton¹⁶⁾ による

14) 表 2 では、Te Korahi Māori と記されているが、その後は He Korahi Māori という表記が使われている。

15) コンセプトペーパーには「Pacific Dimension はイウイ (iwi 部族) と He korahi Māori との強い関係性に基づく」(Auckland War Memorial Museum 2013: 13) とその関係について書かれている。

16) Maori Partnership and Development Coordinator. 2002 年より館のスタッフ。

ツアーは、このミュージアムの建っている土地 (land) についての話から始まった。いきなりミュージアムを案内することはせず、まずエントランスから外に出て、20分かけて館のまわりをぐるりとなぞりながら、土地の場所性についての説明がなされる (写真16)。

館は、オークランドドメイン (Auckland Domain) と呼ばれる、ニュージーランドでもっとも古い公園内にある (写真17)。火山活動によって出来たこの土地は、元々はマオリのもので、部族間の争いがあった土地であることから、Pukikawa (苦い記憶の土地) と呼ばれていた。19世紀後半からは、彼らの土地を巡って、入植者と武装したマオリの間で戦争 (いわゆる New Zealand Wars) が繰り返された。

そのような侵略の歴史に対する反省を踏まえ、1996年にはオークランド戦争記念博物館法 (Auckland War Memorial Museum Act 1996) が出来上がり、この土地に関わる3つのイウイ (部族 iwi) で構成された諮問委員会が立ち上がった。Ngāti Whātua, Ngāti Pāoa, Tainui という3つのイウイによって構成されているこの委員会は Taumata-ā-Iwi と呼ばれ、館とマオリの人々の関係に関わるすべてのプロトコルに関してアドバイスをする権利がある。現在でも2ヶ月に1回集っており、実際に Nicola の話の隅々から、この委員会が館に対して強い発言権を持っていることが伺える。

館内に入ると、地上階のマオリコート (図1, 写真5, 6) にあるマラエ (集会場) に案内される。まなざす対象としてのマオリという開館時のコロニアルな文脈からすると、マラエ、収蔵庫、カヌーの3点こそが、当時のミュージアムがほしいものだったという。また、それ以外のモノも西洋的な分類学によって展示されており、イウイの視点が入ってないという。

実は1929年に完成したこの建物は、このマラエがここに展示されることを前提にしてつくられたが、このマラエは先の3つのイウイのものではないという「問題」がある。収集当時はマオリの文化に対する正確な理解は進んでおらず、部族間にそのような違いがあることすらわかっていなかったからだ。したがって、現在でもこのマラエを定期的に使っているものの、儀式のやり方が違うなど、微妙なところがあるそうだ。さらに、ミュージアムは、この従来のマラエを、より「マオリ的」に演出しようと入口や彫刻を赤く塗ってしまったために、それらを復元するのに30年近くかかったという。当時はマオリと言えば赤、というステレオタイプこそが求められ、マオリがさまざまな色を使うことを認識していなかったのだ。

こうした是正はされつつあるものの、展示室自体は、館の初めての大規模改修が行われた1999年から基本は変わっておらず、今でもマオリの視点が入っていない展示のままだという。一方、小さなコーナーではあるが、'The Treaty of Waitangi' (ワイタンギ条約に



写真16 館の外に出て Nicola が土地の意味について説明してくれる



写真17 ミュージアムはオークランドドメインと呼ばれる公園内に建つ



写真18 展示コーナー 'The Treaty of Waitangi' (ワイタングイ条約に関する展示)



写真19 吹き抜けの手すりにはマオリの文様が見える



写真20 1960年の Archey によるハンドブック (註19参照) にもこのようなマオリの文様の持つ意味が解説されている



写真21 壺の作品名は 'Whaowhia' (2016年)

関する展示) (写真18)、『Not One More Acre!』(土地問題に関する展示)、『160 Years of Kiingitanga』(マオリの王族に関する展示)という3つの新しい展示がつけられており、これらにはマオリの声が強く反映されている。今後の改修で、彼らの視点を全体的に反映していきたいという。

その後1階にあがり、「マオリ自然史 (Te Ao Tūroa-Māori Natural History)」の部屋を案内される(写真11, 12)。ここでは、いわゆる西洋的な分類学ではなく、マタウランガ (Mātauranga マオリの英知) と呼ばれるマオリの自然界の科学と知識を元に構成した展示になっているという。マオリの遺伝学 (geneology) からみると、たとえば西洋近代の科学的な石の分類は全く意味をなさない。このような発想の展示が1999年につくられたことは画期的ではないかと指摘したところ、改修当時、3つのイウィの中のひとつがかなり強く主張したという。しかしその世界観がうまく展示で説明できておらず、来館者に届いていない(館がパブリックにアクセスできていない)ところが問題だと Nicola は指摘した。今後の改修で、当初のコンセプトは引き継ぎつつ、もう少しうまく説明してアクセシブルにしたいという。

その後、再び地上階に戻り、1960年に増築したアトリウムに足を運びながら、朝の団欒の際に Chris Smith¹⁷⁾ が話してくれた館の建築の変化について確認する。マオリの美術に強い関心を示した館長の Gilbert Archey¹⁸⁾ は、1960年の改修に際して建物全体にマオリのデザインを加えたという(写真19, 20)。マオリの文化をまなざす対象として扱うのではなく、ミュージアムの建物そのものにデザインとして入れた Archey は、当時の白人の動物学者としてはかなり進歩的だったと Nicola は言う。

2003~2006年の改修では、さらにマオリの様相を強調することが目指された。しかし、最終的にはアトリウム側の入口に設置されたマオリを象徴する壺(写真21)と、入口に掲げられた格言に集約されてしまったという。壺は、2006年に Brett Graham が彫った 'Whaowhia' (ファオフィア=満たす、彫る) という作品で、ミュージアムのモットーをあらわす言葉だという(同時に Archey の著作¹⁹⁾ のタイトルでもある)。ミュージアムが、

17) Head of Major Works. 館の建築や設備面から館全体の空間をコーディネートする。

18) 1890-1974年。1924年から館長。動物学者だが、1930年代からマオリ美術に強い関心を示し、30点に及ぶ成果物を出版した (Morton, 1998)。

19) タイトルは *Whaowhia: Maori Art and its Artists* で、死の直前に完成した最後の本である (Morton, 1998)。なお Archey が館長として1960年に著したミュージアム・ハンドブックの第2版 *Sculpture and Design: An Outline of Maori Art* (2d ed. Handbook of the Auckland War Memorial Museum) は以下に公開されている (<https://www.knowledge-basket.co.nz/kete/taonga/contents/taonga/text/archey/archey.html> 閲覧日: 2020.7.15)。

文化的・歴史的・科学的な資料の容れ物であり、守護者でもあることを示している。したがって、2007年にスタートした Māori Dimension は、既にあったミュージアムのこのモットーを、より戦略的に焼き直したものだという。

このようなマオリ側のさまざまなナラティブが来館者にあまり知られていないこと、しかも現在の館のつくりからそれがほとんどみえないことは残念なことだと Nicola は指摘する。また、館内でもここまでの知識を持っている関係者は多くはなく、少なくとも改修に関わる関係者には全員これを知ってもらったうえでプランをつくっている、と語った。

2.2 遺骨返還室

(11:45am - Human Remain Repatriation)

次は、遺骨返還室スタッフとのインタビューである (写真22)。応じてくれたのは、返還のための調査とコーディネータをしている Coralie O'Hara²⁰⁾ で、朝マオリの挨拶をしてくれた Robert Newson (以下、Bobby)²¹⁾ と 2 人で遺骨返還作業を担当している。



写真22 Coralie に遺骨返還室の活動について聞く

19世紀に多くの欧米のミュージアムや大学で行われていた人骨収集は、この館でも開館前の1852年から行われており、実に1990年代まで行われていたという。当初はマオリの墓を掘り起こして売買したり、ミュージアムに持ち込む人たちがおり、館長の指示で掘られるケースもあった。また、盗掘によるものだけでなく、嵐のあと等に墓が洗われて出てきたものを、地元の人がミュージアムに持ち込むこともあったという。これらの骨は、他のミュージアムとのコレクションの交換等にも使われており、国内のみならず国外の多くのミュージアムに散逸している。館のコレクションの基礎をつくった Thomas Cheeseman も、マオリの遺骨との交換によって世界中

20) Kotuitui Rangahau Repatriation Coordinator and Researcher. 2016年から館のスタッフ。ニュージーランド国立博物館 (Te Papa Tongarewa-The Museum of New Zealand) で Karanga Aotearoa Repatriation Programme (政府の委託により2003年にスタートした返還プロジェクト) にインターンとして関わる経験があり、これをテーマとして修士号を Victoria University of Wellington で取得 (修士論文は参考文献資料一覧を参照)。2016年にオークランド戦争記念博物館にきて当初は、情報収集と把握に務め、ここにきて、ようやくいろいろ交渉を始めており、やりがいのある仕事だと感じているという。

21) Tumu Here Iwi Relationships Manager.

のコレクションを収集した (Hole 2007; Tapsell 2003より再引用²²⁾)。

オークランド戦争記念博物館は、1980年代からこれらの遺骨を返還し始めたという。しかし、当時は要望があれば応じるという方針に留まっていた。館が自ら遺骨の存在について開示し、積極的に返しに行くという方針を打ち出したのは、2003年だという。ニュージーランド中、そして世界中のものが集まってしまっているために、2006年にはデータベースをつくり、コミュニティに出かけていって、いくつかの返還も手掛けたが、2011年に担当者が亡くなってから作業は止まってしまったという。再び返還を始めるのは2016年で、Coralie と Bobby がその担当になった。なるべく情報を整理し、公開することが自分の仕事だと Coralie は言う (記録も不十分なものが多いため、現在記録の整理に力をいれている)。そして Bobby がそれをもとにコミュニティに出て行く。これまでに、2人で手掛けた返還手続きがひとつ成功し、他にも交渉している最中である。しかし、遺骨の存在を告白し、謝罪し、返還をオーガナイズすることには、ケアと粘り強さと時間が必要だという。二人の活動は、関係性の構築がその主たるものであり、それは一朝一夕で出来るわけではない。

また、ウェリントンにあるニュージーランド国立博物館 (Te Papa Tongarewa-The Museum of New Zealand)²³⁾ が、政府の委託を受けて海外からニュージーランドに遺骨を戻す作業にも関わっているのに対して、オークランド戦争記念博物館は、既に館にあるものだけを扱っているという。それでも、自分の館とコミュニティとの関係のみならず、他館との連携は必須だ。いくつもの館から出かけていくことで、コミュニティに嫌な思いをさせないためだ。また国内での連携は比較的スムーズだが、海外の骨を元のコミュニティに返そうとすると状況がわからないことが多く、交渉は難しい。2006年に太平洋のある島に遺骨を返還しようとしたが、うまく行かなかったという。当時の館長は、時期尚早として打ち切ったが、現在再びどのようにアプローチしたら良いかを考えている。今後、すべての遺骨を返還することが目標だ²⁴⁾。

現時点では、ニュージーランド政府はミュージアムに返還義務を課しておらず、厳密な

22) Tapsell, Paul 'Afterword: beyond the frame', in Peers, L. and AK Brown (eds) *Museums and Source Communities*, Routledge, 2003.

23) 最初期に出来た4つの館のひとつである Colonial Museum (1865年) を前身とし、1998年に開館した大規模な総合博物館。

24) ちなみに、アメリカ人の兵士が持ち込んだ日本兵士の頭蓋骨もあり、現在 (インタビュー当時) 外務省経由で交渉をしているという。

プロトコルも存在しない(関係者が議論して制度をつくっている最中だという)²⁵⁾。しかし、ニュージーランドでは、遺骨はコミュニティのものだという意識が浸透しているため、基本はミュージアムが直にコミュニティと関われば十分で、返還を進めていること自体に科学者や人類学者からの異論なども特にないという。館はオークランド大学に専門知識を開きに行くことはあるが、返還作業そのものに科学者を関わらせる必要はない。一方、大学でも調査をする場合はコミュニティの許可が必要になるという。

少しだけこの遺骨返還を巡る問題について補完すれば、ニュージーランドは先住民との関係性の構築という点においては、他の欧米諸国の考古学よりも進んでおり、中でもこのオークランド戦争記念博物館は、遺骨返還にもっとも真摯に取り組んでいるミュージアムである(Hole, 2007)。それは、先述した博物館法によって、イウィとの関係が明文化され、館に世界で唯一(当時)のマオリの諮問委員会が設けられたことに拠る(同上)。それも2011年には一度止まってしまっていたことが今回のインタビューからはわかったが、2016年には再開している。またHoleは、オークランド戦争記念博物館との比較対象として、ニュージーランド国立博物館(註17参照)を挙げており、政府の委託により国外との交渉を進めてきたこの館が、一方では地元のマオリコミュニティとの関係性をうまく構築できず、そのためにニュージーランド内での返還作業が難航していたことを指摘しており(同上)、交渉の難しさが伺える。

なお、先住民の遺骨返還は、近年世界中の研究機関にとってますます重要なテーマとなっており²⁶⁾、ここに来て、日本の大学や大学博物館におけるアイヌや琉球民族の遺骨返還問題も度々組上に載せられるようになった。

こうして、午前中を使って Māori Dimension が終了し、スタッフとランチを共にした。

2.3 太平洋ディメンション (Pacific Dimension)

(1:15pm - Pacific Collections Access Project and Pacific Curators talk/tour)

午後は「太平洋コレクション・アクセス・プロジェクト (Pacific Collection Access Project. 以下、PCAP)」²⁷⁾ の見学からはじまった(写真23~26)。

25) 2020年7月、ニュージーランドの博物館協会にあたる組織 Museums Aotearoa が、Code of Ethics に返還手続きについて盛り込んだドラフトを公開した (Museums Aotearoa, 2020.7.7)

26) 返還に関する研究をまとめた *The Routledge Companion to Indigenous Repatriation: Return, Reconcile, Renew* (Cressida Fforde, C. Timothy McKeown, Honor Keeler (eds)) が2020年3月に出ており、Coralie も1章執筆している。

27) プロジェクトの概要は以下でみられる。 <https://www.aucklandmuseum.com/discover/research/research-projects/pacific-collection-access-project>



写真23 太平洋コレクション・アクセス・プロジェクト (PCAP) の作業について Jami と Dave に聞く



写真24 現代的な素材を使ったタオンガ (taonga) もみられる



写真25 修復を手がける Siobhan に作業をみせてもらう



写真26 撮影する様子を Jennifer が説明してくれる

まず、プロジェクトを統括している Jami Williams (Project Manager) が、我々に PCAP の全貌を話してくれる。オークランドには太平洋島嶼国にルーツを持つ沢山の人が住んでおり、このプロジェクトは、オークランドの太平洋コミュニティとの連携を強め、館の太平洋コレクションのアクセスを高めるためのもので、3年間 (2016~2019年) かけて進められる。館のコレクションのアクセシビリティを高めるという館の20年構想 (Future Museum) の一環だという。

館に3万点ほどあるコレクションのうち、オークランドと関係の強いコミュニティに属するもの5500点ほどについて、クック諸島、フィジー、フランス領ポリネシア、ハワイ、キリバス、ニウエ、サモア、トケラウ諸島、トンガ、ツバル、イースター島などを含む13

の太平洋コミュニティ²⁸⁾にアクセスしながら調査を進めているという。その際、太平洋コミュニティとコレクションをつなぐ役割を果たすのがCommunity Engagement FacilitatorのMiriam Tuitupou Kutu-Asolupeで、どのコミュニティの誰にアクセスしたらよいかをコーディネートしている。

また、コミュニティの知識所有者(cultural knowledge holders)から、コレクションについていろいろ聞き、モノから切り離されてしまったソースコミュニティの声を再びモノに取り戻し、付帯させていくという。そのために、コミュニティ・デイ(Community Day)を設け、知識を持つ高齢者、さらには未来につながる子供達にも来館してコレクションをみてもらう。彼らは館にとってもっとも優先されるべき来館者でもある。

コミュニティ・デイでモノをひとつひとつ観てもらい、彼らから得られる情報を文章化し、現在ある館のデータデータベースをアップデートするのはCollections Technicianと呼ばれる人たちで、訪問時にはRuby SateleとSonya Withersが勤務していた。それぞれのモノに対して土地の人々が使う呼び名は重要だというのが、たとえば複数のコミュニティが同じ素材や編み込みの技術を使っていたとしてもそれぞれの呼び名があったりするため、複雑な作業だ。19世紀から収蔵庫に眠ったまま「更新」されていないモノも少なくなく、PCAPを通してそれらを再びアクセシブルにするのだという。また、埃がかぶっていたこれらのモノを、今後もコレクションとして保管できる状態に整えなおすことも重要で、Storage TechnicianのValerie Noiret-Leblancがそれを手掛けている。さらに、コレクションを修復するのはProject ConservatorのSiobhan O'Donovanである。壊れ始めているものを修復やクリーニングするだけでなく、状態や修復箇所・方法もきちんと記録することが重要だという(写真25)。

その後、となりの撮影室へ(写真26)。話を聞かせてくれたのは撮影チームのプロジェクトリーダーで写真家のDave Sanderson(Project Leader for the Collection Imaging Team)と、その他5人の写真家の1人Jennifer Carol(Museum Photographer)だ。この6人で、太平洋関係のみならず、マオリ関係、自然史、歴史資料などに関わる館のすべてのコレクションを撮影するのだという。この3年間で215,000点ものコレクションの写真を撮影してきた。コレクションは、工芸品や楽器から自然界の標本まであり、大きさも素材も多様だ。撮影のポイントを把握するために、撮影する際にはそれぞれのキュレーターと密に相談し

28) コンセプトページには、サモア、クック諸島、トンガ、ニウエ、フィジー、トケラウ諸島、ツバル、キリバス、パプアニューギニア、バヌアツ、ソロモン諸島、ミクロネシア連邦が挙げられている。

ているという。また、同じ造作に思われても、島によっても技術や素材が異なるため、ひとかたまりのコレクションを、まずどのように撮影するか注意深く検討し、一気に撮るのだという。また、キリバスに多い骨を使ったモノなどは、コミュニティに撮影許可をとることが必要だという。

Daveが強調していたのは、「公開がデフォルト、非公開は例外 (Open by default, close by exception)」という姿勢だ。重要なのは、クリエイティブ・コモンズにして、すべて無料でオンラインで公開することだという。また、フォトショップ等の加工はいっさいしない。実際、館のホームページにはコレクションの美しい画像が徹底して掲載されており²⁹⁾、アクセシビリティに向けた館の姿勢は、口先だけで終わっていない。なお、太平洋とマオリのイメージを使用したい場合に限り、許可をとってほしいという (cultural permission policy)。使用を制限するためではなく、彼らの文化を尊重するために使用目的を明確にしておかなくてはならないという。ここにも、Teu le vāの精神は反映されている。

2.4 展示リニューアルとドキュメンテーション

(2:15pm - Gallery Renewal visit/talk)

次に、5カ年計画の具体的な展示リニューアルの話聞いた(写真27)。リーダーでキュレーターの Rachael Davies (Head of Content and Interpretation) を中心に、マオリ担当キュレーター Tharron Bloomfield (Project Curator, Māori)、来館者のニーズや体験から展示開発を考える Kate Woodall (Senior Content and Interpretation Developer)、そして建物全体の整合性を考える Chris Smith (Head of Major Works)

という、新しいギャラリーを練る4人がチーム総出で対応してくれた。

新しい構想では、コロニアルな歴史を持つミュージアムを、21世紀に更新するために、マオリの哲学に裏打ちされた He korahi Māori を中心コンセプトとしてデザインするとい



写真27 展示リニューアルの概要についてチームメンバーから話を聞く

29) <https://www.aucklandmuseum.com/discover/collections-online>

う³⁰⁾。具体的には、マオリコレクションへのアクセス、マオリ語の尊重と使用、マオリの価値・物語・視点・声の重視、マオリのなかの多様性の実現を目指している。そのために、西洋的な発想の時系列展示ではなく、マオリの価値を体現する展示構成を目指す。土地 (whenua) と人 (tangata) が中心テーマで、そこではマオリ的価値の理解に加え、マオリの価値観の多様性を示したいという。展示室のためのグラフィックイメージには、マオリのデザイン、モチーフ、色などが使われ、細部が検討されていた。全体として、マオリの物語や歴史をいかに展示室や建物に象徴的に反映させるか、ということが考え方の軸にあるようだ。

マオリ担当の学芸員 Tharon が強調していたのは、伝統的なマオリ文化の表象からの脱却と、コンテンポラリーなマオリ文化を反映した展示作りだ。「伝統的なマオリ文化をみるのを多くの人 (非マオリ、観光者) は喜ぶが、マオリの人たちは複雑な気持ちになる。若いマオリの来館者が誇りを持ち、ギャラリーできちんと自分たちとのつながりを感じられることが重要だ」という。言い換えれば、マオリの人たちが違和を感じるようなプリミティヴィズムを避け、いかに現代のマオリを展示に取り込むかを考えているということだ。そのうえで、知識を押しつけないよう、様々な解釈に開かれた問いを発するようなギャラリーにしたいという。

改修に向けた一連のアイデアが、徹底的に館のコンセプトをブレイクダウンしていく形で進められているという点が印象的だった。どの細部に関して質問しても、まずは世界観の説明から入るという姿勢は徹底しており、このような思考方法そのものもマオリの文化と連動しているのだろうと感じた。

(3:30pm - Documentary Heritage visit/talk)

その後、館のドキュメンテーションについて、ライブラリー関係者に話を聞く (写真28)。コレクションマネージャーの Paula Legel (Collection Manager Serials & Acquisitions)、手紙・日記など手書きの原稿や写本担当のキュレーター Nina Finigan



写真28 ライブラリーで Paula, Adam, Nina, Zoe へのインタビュー

30) とりわけ Mana whenua (土地の権利) kaitakitanga (守護), manaakitanga (ホスピタリティ) という principle から、ギャラリーを構成し直すという。

(Curator Manuscripts)、画像権利処理担当の Zoe Richardson (Image Orders and Permissions Manager)、オンラインのコレクション・データベースを管理する Adam Moriarty (Head of Information, Library and Enquiry Services) の4人が話しを聞かせてくれた。

ライブラリーは出版や展示等で画像やイメージを使いたいという申請に対応しており、かなりの数に上る。ひととおりは手続きが決まっているが、中にはイウィと連絡を取って処理を終えるのに9ヶ月かかったものもあるという。2014年までは、決まった権利処理のプロセスがなく、経験則や個人的関係でやっていたが、ようやくプロトコルをつくったという。まず2014年には He korahi Māori の戦略のもと、マオリの人たちの許可を得るプロセス (Māori cultural permission process) を導入し、2016年には Teu le vā の戦略のもと、太平洋でも同じ手法をとりはじめた (ずっとこの2つの戦略がついてまわるのよ!と冗談めかすスタッフ)。マオリとの関係はこれまでも構築してきたが、太平洋の人々との関係のほうはあまり進んでいなかったという。現在、PCAPと連携しつつ、たとえばコミュニティ・デイに文書なども公開してもらおうことで、知識保有者達を起点に関係を構築しはじめている。昔の写真や新聞記事など、すべて彼らの祖先に関わることなので、その都度大きな反響があるという。また、ライブラリーに保管されていた個人的な手紙なども、現在来歴を調べ始めている。

さらに、画像やイメージの公開も積極的に行っている。現在、22社のウェブサイト画像を提供しており、中でもウィキペディアでは86カ国語に対応する10万点の画像を提供している。なるべく多くのオーディエンスに届けたいという。

ライブラリーや先の撮影チーム (2.3参照) の仕事はきわめて地味だが、今回、この調査報告を書くにあたって、いかに館が情報公開を進めているかが実感として伝わってきた。ホームページは何層にもなっており、そこに掲載されている画像も情報も膨大であり、こちらが探し求めている情報は、すべて惜しみなくネット上に公開されている。デジタル化と情報公開 (アクセス) は、この館がずっと取り組んできたことであり、その成果は十二分に感じられた。

2.5 Teu Le Vā (関係を育む)

(2:00pm – Teu le vā talk and how it works in the museum)

(4:00pm – Cup of tea to review)

午後のインタビューを貫く Pacific Dimension が体現するのが、Teu le vā という概念だ

（ただし、Māori Dimension 含めてゆるやかに館全体のホスピタリティを表している）。今回の視察をコーディネートしてくれた Olivia はこのミュージアム初の Teu Le Vā Manager である³¹⁾。Teu le vā に関する説明は、本来であれば午前中の早い段階に組み込まれていたが、他のインタビューが延びたために、合間を縫って手短かに話してくれた（写真29）。



写真29 OliviaとChrisにTeu Le Vāについて聞いた

Teu le vā は、関係を育む (nurture the relationship) という意味だが、そこには人同士の関係のみならず、人と土地、場所、モノとの関係も含まれている。先の PCAP (2.3 参照) は、Teu le vā の具現化だという。すなわち、コレクションに関わるコミュニティが館を訪れると、館は彼らからきわめて貴重な情報が得られ、その一方で彼らは自分たちのコミュニティに属するタオンガ (taonga 宝) とつながる。タオンガの中にはもうコミュニティでつくられなくなってしまったものも含まれており、来館することで彼らがそれらと再びつながるきっかけになる。契約や取引 (transaction) ではなく関係性 (relationship) が重要で、それが結果的にミュージアムの扉を開く、という Olivia の解説は、これまでのインタビューすべてに合致する。

10時に始まり、16時すぎまで途切れることなく入っていた怒濤のインタビューを終えると、これまでもほとんど同席していた Olivia は、ミュージアム・カフェに我々を連れて行き、閉館する17時までリフレクションにつきあってくれた。そして、再び Bobby も立ち寄り、二人で最後までもてなしてくれる。これがまさに Teu le vā なのだろう。

Bobby が自身の出自について話してくれた。マオリ語しか話せない祖父母に育てられ、幼少期はマオリ語しか話せなかったこと、マレーシア危機やベトナム戦争にも兵士として参加したこと、市の職員を退職してからミュージアムの契約スタッフに応募し、現在は専任職に就いていること。イウィとの関係をつくる担当者として、ミュージアムで儀式やプロトコルを担当しており、いわばミュージアムとマオリの関係性の部分を構築する要の人物である。遺骨返還については、とりわけ、返し方を丁寧に交渉するという。ミュージア

31) 註12参照。太平洋に関する諮問委員会である Pacific Advisory Group (2013年) を東ねている。ただし、先述したマオリの諮問委員会 (Taumata-a-Iwi) と評議委員会 (Trust Board) は館の博物館法に則っているが、これは法規的な組織ではないという。

ム側から現地に届けてほしいコミュニティもあれば、ミュージアムに取りに来たいコミュニティもある。Bobby曰く、ミュージアムの人に災いが起こらないように、骨を大事に扱い、死者の尊厳を大事にすること、そしてマオリのスピリチュアルな部分を尊重することが非常に大切なのだという。

最後のBobbyの話に象徴されるように、ミュージアムというきわめて近代的な施設において、制度やシステムをさらに近代化させながらもマオリや太平洋の思想を体現していくというニュージーランドならではのミュージアムのあり方を、興味深い形で体現しているのがこのミュージアムといえるだろう。

17時、ミュージアムのドアが閉まり始め、慌てて別れの挨拶をした。

3. 考察

最後に少しだけ、今回の調査を包括的な視点から振り返っておきたい。

まず考えておかななくてはならないのは、今回の調査対象であるオークランド戦争記念博物館が、ニュージーランドの多文化に対して、どのような姿勢と位置を目指しているかについてである。

冒頭に述べたように、ニュージーランド建国の基礎には、ワイタンギ条約がある。1840年、先住民がイギリス国王と取り交わしたこの条約により、植民地国家が建設された。しかし、マオリ語版と英語版では、その主権のあり方の記述に大きく差があるという問題に対して、1960年代後半になるとマオリが次々と声を挙げはじめ、マオリと英国系・ヨーロッパ系住民（パケハ）との「対立は目にみえる形で現れ始め」る（内藤2008：383）。その一方で、戦後のマオリの都市化や、移民政策の緩和により世界中から移民が集まりはじめたことに対しても、「パケハとマオリの歴史的な構図をほかしてしまう多民族化・多文化化」としてマオリの人々は同様の「警戒感」を抱いていた（同上）。たとえば、ファナウ（whanau 拡大家族）、ハプ（hapu 準部族）、イウィ（iwi 部族）、ワカ（waka カヌーを共にする一族）といった単位で自分たちの社会集団をアイデンティファイする「伝統的」なマオリの価値観に対して、マオリを一つの民族として括り、汎マオリ的なアイデンティティを意識的に獲得しようとする「アーバン・マオリ」たちが都市に出現し、マオリの状況を大きく変えていったのである。さらに、2000年代前半になると、マオリ優遇策へのパケハの不満が募り、「すべてのニュージーランド人」や「一律の市民権」を主張する政策の揺り戻しが起きている（内藤 2008）。

このように、ニュージーランド特有の二文化主義（biculturalism）と多文化主義（multiculturalism）が絡み合う複雑なアイデンティティの相剋は、教育行政にも緊張感を持って反映されてきた（Matsumoto 2006）。そのなかで、英国的・ヨーロッパ的価値観の申し子といえるニュージーランドのミュージアムは、自国の文化や歴史をどのように捉え、どのように活動し、どのように展示するかに対して、意識的にならざるを得ない。

やや古いが、2012年の統計では、ニュージーランドには少なくとも471館のミュージアムがあり、そのうち60%はボランティアによって運営される地元の施設、30%が常駐スタッフ1～5人程度を抱える小規模館、残り10%がオークランド戦争記念博物館のような大規模館であった（McCarthy 2014.10.22）。そして、大規模館であればあるほど、また館が古い歴史を持てば持つほど、ニュージーランドの歴史そのものを体現している。それゆえに、そうした館は徹底的にマオリ文化や太平洋島嶼国の文化を尊重し続けることで、いわば贖罪とともに、コミュニティとの共生を目指している。二文化主義と多文化主義、マオリとパケハ、そして伝統的マオリとアーバン・マオリの間の緊張感も、小さな決定や交渉を繰り返す日々の博物館運営の中で全くないはずはないが、オークランドドメインに建つオークランド戦争記念博物館が、1996年の博物館法の制定と Māori Dimension の実現を通して、土地のマオリ（3つのイウイ）との関係を館の一番の土台に置くその姿勢には、迷いはない。

実は2日間の行程のなかで、スタッフの体現する世界観、あるいはソフトとしてのミュージアムと、建物や展示が体現するとハードとしてのミュージアムに大きなズレがあると感じた。そして、このズレこそが、当初のコロニアルなミュージアムが、長い年月をかけて、そこから脱しようとする試みの表れなのだといえるだろう。むしろミュージアムの西洋的で植民地主義的な出自こそが、館を徹底的に二文化主義のうちのもう片方の文化（非西洋側）に躊躇なく寄せていく舵を切らせているのだろう。スタッフが指摘するように、展示空間は1999年に出来た当時のままで、彼らの言う姿勢は反映されていないのである。また戦争記念館でありながら、肝心のマオリと入植者たちとの戦いは十分には取り上げられていない。2017年にスタートした5カ年計画の中でこうしたズレは徐々に是正されて行くことが目指されているのだろう。

現段階では、館はコロニアルなハード面を、マオリ文化や太平洋文化の価値観を体現するスタッフの存在や、対話と取り組みといったソフトで包み込むことで、先住民や近隣の島嶼国との関係性を紡いでいくことを目指している。いわば建物や展示の物語を脱構築する文化的戦略といえよう。リニューアル後の館のハード面に、その後どのようにそれが的確に反映されるのかは今後改めて調査したい。しかし、関係性作りというソフトの位相へ

の大量投資によって、ハードの位相を乗り越えようとする取り組みは徹底していた。

最後に多文化主義という観点からひとつ指摘するなら、館の最新の5カ年計画においては、「最新のオークランドプラン³²⁾に従い、誰もが属すことのできるインクルーシブなオークランドを涵養し、マオリと太平洋アイデンティティと幸福を推奨する」と述べられている。本稿でもみてきたように、その中心はあくまでマオリとの関係性であり、また近隣の太平洋島嶼国との関係性である。換言すれば、アジア圏まで含めた多様な移民の包摂は、あくまでも二文化主義の先にある太平洋島嶼国の文化の、さらに先にあるものといえるかもしれない。

【参考文献資料一覧】

- 市川昌「ニュージーランドの博物館とマオリ文化——多民族社会と規制緩和のコミュニケーション活動」『日本生涯教育学会論集』26、2005年。
- 内藤暁子「〈土地の人〉と〈条約の人〉——ニュージーランド「国民」形成におけるワイタング条約の意義」『文化人類学』73(3)、日本文化人類学会、2008年。
- 西川圭輔「ニュージーランドの移民政策と移民の経済的影響——オークランド経済における移民労働者の貢献と活用」『オーストラリア研究紀要』32、2006年。
- 宮里孝生「フィールドノート 共生のシンボル?——ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワにおけるマラエ造形の解釈」『共生の文化研究』2 多文化共生研究所、2009年。
- 村田麻里子・吉荒夕記「21世紀のミュージアムと多文化共生——日英における文化的挑戦」『博物館学雑誌』43(2)、全日本博物館学会、2018年。
- Auckland War Memorial Museum 'Future Museum: Auckland War Memorial Museum Master Plan', 日付なし。
- 'Teu Le Vā - Nurture the Relationship: The Pacific Dimension at the Auckland War Memorial Museum', 2013.
- 'Auckland Museum Guide' 2016.
- 'He Korahi Māori Strategic Pathways' 2016.
- 'Greater Reach and Impact: Five-Year Strategic Plan 2017-2022', 日付なし。
- Goulding, Jeanne H. 'Cheeseman, Thomas Frederick', Dictionary of New Zealand Biography (first published in 1996), Te Ara: the Encyclopedia of New Zealand, 1996.
- <https://teara.govt.nz/en/biographies/3c14/cheeseman-thomas-frederick> (閲覧日: 2020.7.10)
- Hole, Brian 'Playthings for the Foe: The Repatriation of Human Remains in New Zealand' *Public Archaeology*, 6 (1), 2007.
- Matsumoto, Akinori 'Maori Education, Biculturalism and Multiculturalism in New Zealand' *Japan Society for New Zealand Studies*, 18, 2011 (松本晃徳「ニュージーランドにおけるマオリの教育とバイカルチュラリズムおよびマルチュカルチュラリズム」『日本ニュージーランド学会誌』18、2011年、

32) 註5を参照のこと。

英語論文).

McCarthy, Conal 'Museums', Te Ara - the Encyclopedia of New Zealand, 2014.10.22.

<http://www.TeAra.govt.nz/en/museums> (閲覧日: 2020.7.10)

Morton, John 'Archev, Gilbert Edward', Dictionary of New Zealand Biography (first published in 1998). Te Ara - the Encyclopedia of New Zealand, 1998.

<https://teara.govt.nz/en/biographies/4a20/archey-gilbert-edward> (閲覧日: 2020.6.30)

O'Hara, Coralie, Repatriation in Practice: A Critical Analysis of the Repatriation of Human Remains in New Zealand Museums (Master's thesis), Victoria University of Wellington, 2012.

<http://hdl.handle.net/10063/2415> (閲覧日: 2020.7.15)

Museums Aotearoa, Agenda of the twenty-first Annual General Meeting of Museums Aotearoa, 2020.7.7.

<https://www.museumsaotearoa.org.nz/publications/repository/museums-aotearoa-agm-agenda-2020> (閲覧日: 2020.7.15)

(その他ホームページ 最終閲覧日: 2020.7.15)

The Auckland Plan- The Auckland Council

<https://www.aucklandcouncil.govt.nz/plans-projects-policies-reports-bylaws/our-plans-strategies/auckland-plan/Pages/default.aspx>

Auckland War Memorial Museum

<https://www.aucklandmuseum.com/>

NZ Museums

<https://www.nz museums.co.nz/about-us>

Māori Dictionary

<https://maoridictionary.co.nz/>

Museums Aotearoa

<https://www.museumsaotearoa.org.nz/>

The Karanga Aotearoa Repatriation Programme- Museum of New Zealand Te Papa Tongarewa

<https://www.tepapa.govt.nz/about/repatriation/karanga-aotearoa-repatriation-programme>

※本調査の実現に力を貸して下さった JICA 青年海外協力隊派遣・サモア国立博物館学芸員(当時)の慶野結香氏、オークランド戦争記念博物館・太平洋シニアマネージャーの Olivia Taouma 氏、その他インタビューに応じてくれたスタッフの皆さんに厚く御礼申し上げます。

A very special thanks to Olivia Taouma, Robert Newson, Nicola Railton, Chris Smith, Coralie O' Hara, Jami Williams, Miriam Tuitupou Kutu-Asolupe, Ruby Satele, Sonya Withers, Valerie Noiret-Leblanc, Siobhan O'Donovan, Dave Sanderson, Jennifer Carol, Rachael Davies, Tharron Bloomfield, Kate Woodall, Paula Legel, Nina Finigan, Zoe Richardson, Adam Moriarty, of Auckland War Memorial Museum (in order of appearance in the paper) and Yuka Keino (Museum of Samoa Curator, Japan International Cooperation Volunteer 2017~2019).

※本稿は、2018~2020年度学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)「多文化共生時代のミュージアムを分析する手法の開発及びその理論化」(研究課題番号18K01105:代表・村田麻里子)の成果の一部である。

